

< 論 説 >

解釈・実情を伝える構文

— It is that 節構文の意味特性と使用条件 —*

大 竹 芳 夫

1. はじめに

人間の言語において聞き手に容易には同定しがたい情報を伝達する場合、話し手は特別な形式をしばしば使用する。次の英語と日本語の談話を観察しよう。

- (1) I cannot pay you back today. It's just that all the banks are closed. (Koops 2007)
 (2) 今日はお金を返せないよ。銀行が全部閉まっているだけなんだ。

(1) - (2) の日英語の談話では、「今日はお金を返せない」という先行する情報に対して、話し手は自分の持ち合わせている知識と関連付けなければ聞き手には容易には知りたい情報を、下線を付したような特別な構文によって提示している((1) - (2) の下線部の構文を以下ではそれぞれ It is that 節構文、「の(だ)」構文と呼ぶことにする)。Otake (2002)、大竹 (2007; 2008) は It is that 節構文と「の(だ)」構文の意味・機能の個別性と普遍性を分析しているが、Koops (2007) や Rosenkvist (2007) といった最近の論考では Otake (2002) の研究成果が言及され、英語の It is that 節構文と形式的に対応する他言語の構文との興味深い意味的・機能的特性が明らかにされつつある。例えば、Rosenkvist (2007) は It is that 節構文に対応する南部スウェーデン語の構文として (3) のような Det är som 構文を取り上げ、主にその語用論的特性について「の(だ)」構文とも比較対照した上で考察している。

* 本研究は、「新潟大学言語研究会 (NULC) 第29回研究発表会」(平成20年7月28日、於：新潟大学)及び「第15回ことばを考える会」(平成20年9月10日、於：新潟大学)での発表原稿に大幅な加筆修正を施したものである。発表の際に、貴重なご意見をいただいた方々に心から感謝の意を表したい。なお、本研究は、平成18-20年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号18520377「日英語における名詞節化形式と意味・機能の関係に関する実証的・理論的研究」(研究代表者：大竹芳夫)、平成20年度新潟大学プロジェクト推進経費 (奨励研究)「名詞節化構文の意味派生と談話機能のメカニズムに関する日英語比較対照研究」(研究プロジェクト代表者：大竹芳夫) および平成20年度新潟大学人文社会・教育科学系長裁量経費による研究プロジェクト (学系奨励研究)「日英語の名詞節化形式の統語構造と意味・機能のインターフェースに関する研究」(研究プロジェクト代表者：大竹芳夫) の研究成果の一部である。

- (3) Det är som jag inte är tillräckligt snygg.
 (Lit.) *it is som I not am enough pretty* (Rosenkvist 2007)
 (私はあまりかわいくないのだわ)

本研究では、It is that 節構文に関して Koops (2007) で得られた新たな知見を検証しながら、It is that 節構文及び南部スウェーデン語の Det är som 構文と「の (だ)」構文とに共通する語用論的効果を考察し、解釈・実情を伝える構文の言語間に見られる特性を分析する。

2. 解釈・実情を伝える It is that 節構文の使用条件

英語の談話で頻用される It is that 節構文の意味的、機能的特性については、大竹 (2008) ですでに詳しく論じている。ここでは、It is that 節構文の使用条件について概観しておくことにする。

第一に、It is that 節構文は (4) に示すような意味特性を示す。

- (4) It is that 節構文は聞き手には容易には同定しがたい情報を表現し、(A) 話し手の論理で解釈を提示する場合と (B) 実情を披瀝する場合とがある。It is that 節構文の主節主語 it が語彙名詞句により限定され、(B) の標識 “The {gist / conclusion} of it is that …”, (B) の標識 “The {fact / truth / thing} of it is that …” が具現化する事例が見受けられる。
 (大竹 2008)

It is that 節構文の主節主語 it が語彙名詞句により限定を受け、(A) 話し手の論理で解釈を提示する場合と (B) 実情を披瀝する場合は、それぞれ (5)–(6) に例示される。

- (5) The Aussies are doing their best to unsettle the Poms, so Glenn McGrath growls, Ian Healy grumbles, the press grins — and decent men grimace. *The gist of it is that* England have no chance, mate. (The Guardian, Oct. 22, 2002)
 (オーストラリア人たちはイギリス人移住者たちの心を動揺させるのに全力を尽くしている。Glenn McGrath はがみがみ言い、Ian Healy はぶつぶつ言い、新聞は怒りで歯をむき出し、そして礼儀正しい男たちも顔をしかめている。結局、イギリスはチャンスがないんだ)
- (6) Rehabilitation is not our job. *The truth of it is that* we are warehouseers of human beings. (The Observer, Aug. 19, 2001)
 (リハビリテーションは私たちの仕事ではない。本当は、私たちは人間の強制収容施設なのだ)

第二に、大竹（1994; 2003; 2007; 2008）で考察したように、*It is that* 構文の基本的意味は、先行する情報が話し手の知識の蓄積にすでに取り込まれていることを主語代名詞 *it* で合図したうえで、その情報を同定することである。そのため、話し手が聞き手の誤解を解いて実情を披瀝するような談話で頻用される。

- (7) a. I can't eat the chicken. *It's not that* I can't eat it, *it's just that* I've got a piece of gum in my mouth and I don't know what to do with it.

(*The Guardian*, Sep. 2, 2002)

(私はその鶏肉を今食べられません。鶏肉が食べられないのではありません。口にガムが入っていて、そのガムをどうしたらよいかわからないだけなのです)

- b. A: Six languages? Are you showing off?

B: Oy vay!

A: That's, like, a seventh language.

B: You're annoying me. It's like being interviewed by the biggest snotty bullyboy in the world.

A: *It's just that* you seem kind of serious. What do you do for fun?

(*TIME*, May 25, 1998)

(A: 6ヶ国語ですか？話してみてくださいますか？)

B: Oy vay!

A: 今のは、7ヶ国語目のようですね。

B: 困ったなあ。世界の威張りくさった政治ごろにインタビューを受けているようだよ。

A: ただ、まじめに見えただけなんです。気晴らしは何ですか？)

(7a) では、“I can't eat the chicken.” と発した話し手は、すぐにその発話が聞き手にとって曖昧に解釈されたり、誤って解釈される可能性を予測し、〈話し手が鶏肉を食べ物として日常的に好まない (=I can't eat it.)〉という解釈を *It is that* 節構文で打ち消している。次いで、〈話し手がその鶏肉を食べることができない〉という冒頭の情報が、実は〈話し手の口の中にガムがあり、それをどうしたらよいかわからない〉という情報と結びついているにすぎないことを話し手が *It is that* 節構文で断定するという情報伝達の構図をとっている。このように、*It's just that* 構文は、先行文脈の発話内容が聞き手に誤解される可能性を予測する話し手が、話し手のもち合わせる情報と関連付けて解釈するのに用いられる。一方、(7b) では、*It is that* 節構文は先行する発話内容ではなく、先行する “That's, like, a seventh language.” という発話の意図を聞き手に誤解されたことを受けて発せられており、話し手の実際の発話意図が伝えられている。

第三に、*It is that* 節構文は発話の契機となる情報が先行文脈で言語的に与えられていなければ

使用できない。この *It is that* 節構文の使用条件は、日本語の「の(だ)」構文と比較対照することで明確にとらえることができる。*It is that* 節構文は(8a)が示すように談話冒頭や、(9a)が示すように場面的状況を受けての発話は容認されず、先行性が言語的文脈により保証されなければならない。一方、「の(だ)」構文は(8b)、(9b)が示すように場面的状況を受けるのであれば談話冒頭であっても発話が容認されるという相違がある。

- (8) a. Oh! {I have / *It's (just) that I have} no money.
 b. あれ、お金が {ない / ないんだ}。
 (9) [話し手が脚を搔きながら]
 a. {I was bitten / *It's (just) that I was bitten} by a mosquito.
 b. 蚊に刺され {ちゃった / ちゃったんです}。

本節では、*It is that* 節構文の基本的特性について概観し、聞き手には容易には同定しがたい解釈や実情を披瀝する場合に用いられること、「の(だ)」構文とは異なり、談話冒頭や場面的状況を受けての発話は容認されず、先行性が言語的文脈により保証されなければならないことを確認した。

3. Koops (2007) の分析と検証

Koops (2007) は、Otake (2002) も含め *It is that* 節構文についての先行研究を踏まえながら、その特性に関して興味深い議論をしている。

まず、前節で確認したように、英語の *It is that* 節構文は言語的な文脈を発話の契機としなければならないが、日本語の「の(だ)」構文のように他言語の対応構文の中には場面的状況が発話の契機としてもよいものもある。Koops (2007) は、この点に関して *It is that* 節構文と比較対照するために、「の(だ)」構文については Otake (2002) を、スペイン語の *Es que* で始まる構文については Delahunty and Gatzliewics (2000) を引き合いに出している。Delahunty and Gatzliewics (2000) が観察するように、スペイン語の *Es que* で始まる構文は場面的状況を契機として発話されてもよい。(10) のスペイン語の談話では、帰宅した妻に家の中が散らかっているのを見られた場面的状況を受けて、夫が *Es que* で始まる構文を発話している。

- (10) [帰宅した妻に家の中が散らかっているのを見られた夫の発話]

Es que estaba buscando las ceras para la nina.

“It's that I was looking for crayons for the child.” (Delahunty and Gatzliewics 2000)

一方、スペイン語とは異なり、英語の *It is that* 節構文は、先行性が言語的文脈により保証され

ない (10) のような場面では発話が認可されず、次のような構文が自然であると Koops (2007) は述べる。

- (11) I was looking for the crayons for the child. (Koops 2007)
(子供のためにクレヨンを探していたんだよ)

こうした事例から、Koops (2007) は、日本語やスペイン語の同種の構文に比べると、It is that 節構文は使用制限がより厳しいと主張している。

第二に、Koops (2007) は、It is that 節構文は実際の談話において修飾表現を伴わない、そのままの形 (bare) で用いられることは極めてまれであると指摘する。Koops (2007) のデータ観察によれば、It is that 節構文がそのままの形で用いられる用例は、否定形の It is that 節構文、つまり It is not that 節構文に後続する文脈で使用された (12) の 1 例のみであると言う。

- (12) *It's not that you don't want it on your lawn, it's that you don't want it sitting around, before it goes on your lawn.* (Koops 2007)
(君はそいつを自分の芝地に上がらせたくないんじゃない。君はそいつが芝生に上がる前に、あたりをのらくらさせたくなかったんだ)

たしかに、Koops (2007) が指摘するように、否定形の It is not that 節構文に後続する文脈では It is that 節構文が just や助動詞を伴わないそのままの形で使用される用例が実際の言語資料で観察される。(13a-b) では It is not that 節構文に後続する文脈で、It is that 節構文がそのままの形で用いられている。

- (13) a. “But why after seeing Skip did you not want to help him? Especially in light of what’s been uncovered about Dr. Smith.” *It’s not that I didn’t want to help him, Mrs. Reardon. It’s that I can’t help him.* (M. H. Clark, *Let Me Call You Sweetheart*)
(〔前半部訳省略〕「彼を助けたくなかったのではありません。私には彼を助けることができないのです。〕)

- b. Q. What does it mean to understand? […].

I have not been speaking, and hardly thinking, being very much in the here and now, and walking very slowly for three days, eating in silence. In the paying attention, in the walking, I am practicing engaged Buddhism. And I am beginning to understand. *It is not that I know, it is that I understand.* Understanding resides in a place outside of knowing […]. (http://layogamagazine.com/issue11/departments/thichnhathanh.htm)

(〔前半部訳省略〕 私は知るのではなく、悟るのである。悟るということは知ると

いうことの外に存在する […])

もちろん、否定形の *It is not that* 節構文に後続して、そのままの形の *It is that* 節構文が常に使われるわけではない。先に示した (7a) では *It is not that* 節構文の後に、*just* を伴う *It is that* 節構文が用いられているし、次の (14) では *It is that* を伴わない無標の平叙文形式 (破線部) が用いられている。

- (14) No wonder she seeks employment outside of Malawi - to go to South Africa, go to Europe, to Britain or to the US. *It is not that* she wants to leave, she has to.

(*Guardian Unlimited*, Feb. 16, 2006)

(彼女が Malawi から出て、南アフリカ、ヨーロッパ、イギリス、アメリカといったところへ行き、職を求めるのは不思議ではない。彼女は出て行きたがっているのではなく、出て行かなければならないのだ)

Koops (2007) が指摘するように、実際の談話において *It is that* 節構文がそのままの形で使用される例はたしかに多くはない。Koops (2007) はこうした事実を踏まえながら、*It is that* 節構文に関する従来の研究で引き合いに出されてきた次のような例文について批判的に検証している。

- (15) He was shot in his house. *It is that* he knew too much. (Declerck 1992)

(彼は自宅で撃たれた。彼は知りすぎていたのだ)

Koops (2007) は、Declerck (1992) が挙げる (15) の例文について、アメリカ人英語母語話者の調査結果を踏まえて「文法的ではあるが談話での使用は不自然 (grammatical but unnatural)」であると指摘している。Koops (2007) によれば、(15) の談話で *It is that* 節構文をそのままの形で使用することは不自然であるが、次の (16a-d) のような形式であれば、(15) の *It is that* 節構文とは意味や発語内効力は異なるが問題なく用いることができると主張している。

- (16) a. He knew too much.
 b. It's because he knew too much.
 c. It may be that he knew too much.
 d. Is it that he knew too much?

Koops (2007) は、(16a) のように無標の平叙文形式、(16b) のように *It is because* を用いる形式、(16c) のように法助動詞 *may* を伴う *It is that* 節構文、(16d) のように疑問形式の *It is that* 節

構文ならば、(15) の談話で自然に使用できることを観察している。つまり、It is that 節構文を推論構文 (inferential construction) と位置づける Koops (2007) は、(15) の “He was shot in his house.” という情報は “It is that he knew too much.” という推論を導くのに不十分であると主張している。なお、Koops (2007) は、(15) の It is that 節構文が just を伴った (17) のような場合の容認可能性については言及していないが、筆者のインフォーマント調査では相当に不自然な使用であり、実際には用いられないということが確認されている。

(17) He was shot in his house. ^{?”}It is just that he knew too much.

It is that 節構文がそのままの形で使用されることが極めてまれであるという Koops (2007) の指摘は非常に興味深い。また、It is that 節構文がそのままの形で用いられるのは、否定形に後続する場合や、疑問形で使用される場合などに限られるという観察に基づいて、従来の論文で扱われてきた It is that 節構文の言語データの中に不自然なものがあるという指摘も有益な情報である。しかし、It is that 節構文がそのままの形で用いられるのは、このような条件下だけではない。Koops (2007) では言及されていないが、thus や and so に導かれて先行情報の解釈を論理的に「帰結」や「結論」として引き出して提示する It is that 節構文はそのままの形で使用される事例が確認できる。たとえば、次のような談話では It is that 節構文が thus や and so に導かれてそのままの形で使用されている点に注意されたい。

(18) a. Her mother “didn’t much care if her daughters were married but cared deeply that we get university degrees”, and thus it was that, by dint of the judicious trading of family heirlooms, Elli Strassinopoulos was able to bring both girls to London while they were in their teens, Arianna destined for Cambridge and Agapi for Rada.

(The Sunday Times Magazine, Jan. 22, 1995)

(彼女の母親は「娘たちが結婚するかどうかは余り心配せず、私たちが大学の学位を取るかどうかを大いに気にかけていた。」だから、世襲財産の思慮深い運用のおかげで、Elli Strassinopoulos は娘達を十代のうちに二人ともロンドンへやり、Arianna はケンブリッジ大学に、Agapi はロイヤル演劇アカデミーにあげることができたのである)

b. Writers, on the other hand, live in a floating world, where ideas swim up to audition all the time. So it is that out of the Niagara Falls, where this diary found me last week, the bubble of a story has suddenly surfaced. (The Times Magazine, Nov. 13, 1993)

(一方、作家は、考えが絶えずオーディションを受けに浮かび上がるうたかたに生きている。だから、先週私がこの日記を見つけたナイアガラの滝から、ある物語の泡が突然水面に浮上してきたのだ)

- c. What was more fitting than to give the name of this man to a type of portraiture then so much in vogue? And so it is that Etienne de Silhouette, finance minister of France, interested far more in money than in art, is remembered in connection with the type of picturization that bears his name. (N. Lewis, *Better English*)

(この男の名前をその当時大変人気があった肖像画法につけることよりも適切なことがあったらどうか？ そうしたわけで、フランスの財政相で芸術よりもお金に関心をもっていた Etienne de Silhouette は自分の名前のついた画法との関連で記憶されているのである)

上記の (18) は、「帰結」や「結論」を表す語用論的接続詞 *thus* や *and so* に導かれて、先行することがらと帰結、結論の意味関係を表す *It is that* 節構文の用例である。大竹 (2008) で論じたように、こうした用例については、これまでほとんど注目されてこなかったように思われる。(18) のような帰結、結論の用法は *It is that* 節構文の具体的な意味全体から見ればたしかに頻度は低い。しかし、質的には、*It is that* 節構文の表す具体的な意味として従来の研究において指摘されてきた原因、理由と対極をなし、この構文の基本的意味を論ずるうえで十分に考慮に入れなければならない意味である。*It is that* 節構文がこうした接続詞に導かれる場合、そのままの形で使用されるという点は注目すべき特性である。

4. *It is that* 節構文の意味特性再考

前節で確認したように、*It is that* 節構文がそのままの形で発話されるのは否定形の *It is not that* 節構文に後続する場合や、接続詞 *thus* や *and so* などに導かれて、先行する命題内容と「帰結」、「結論」の意味関係を表すような場合である。また、実際の談話では *It is that* 節構文が *just* をしばしば伴うという特徴がある。*It is that* 節構文が *just* と共起する事例が多いということは、下記に示すように英英辞典の *just* の項に *It's just that*…として *It is that* 節構文が収録されているという事実からも裏付けられる。

- (19) a. I didn't mean to upset you. *It's just that* I had to tell somebody.

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*⁶)

(私はあなたをびっくりさせるつもりではありませんでした。ただ、だれかに話さなければならなかっただけなのです)

- b. I know I said I'd have the report finished by today, *it's just that* (= I haven't done it because) I've been busy. (*Cambridge International Dictionary of English*)

(私は今日までに報告書を仕上げると言ったことはわかっていますが、ただ(仕上げられなかったのは)私は忙しかつただけなのです)

- c. You use the expression **It's just that** when you are making a complaint, suggestion, or excuse, so that the person you are talking to will not get annoyed with you.

(Collins COBUILD English Dictionary)

(**It's just that**という表現は、聞き手に腹を立てさせないようなかたちで、話し手が不満や意見を述べたり、弁解をする場合に用いられる)

Koops (2007) は、It is that 節構文が just としばしば共起する理由については特に説明していない。Lee (1991) は、just の語用論的特性を分析し、just には話し手が相手の主張や提案を否定したり断ったりする際に対人関係を良好に保つための緩衝機能があると主張している。本研究で論じている It is that 節構文は相手の誤解を予想し、それに代わる話し手の解釈を表現する。裏を返せば、It is that 節構文には相手の解釈の誤りや知識の欠如を問題にする可能性がついてまわる。大竹 (2008) は、just に関する Lee (1991) の考察を踏まえ、It is that 節構文に just が多く使用される理由は、話し手が聞き手の誤解を予測し、ある情報を既定のものとして談話に導入する際に、聞き手にその情報を押し付けている、あるいは聞き手の無知をあげつらっているという含意を積極的に回避しようとする話し手の気持ちの表れであると分析している。

さて、(18a-c) で観察したように It is that 節構文が thus や and so に導かれるような場合、just と共起する用例は手元の資料にはひとつもない。接続詞 thus や and so に導かれる It is that 節構文が just と共起しがたい理由は次のように考えられる。つまり、接続詞 thus や and so は「帰結」や「結論」といった論理関係を積極的に合図することから、それらに導かれる It is that 節構文は、論理に従えば先行情報から順当に引き出される解釈を伝えている。すなわち、thus や and so に導かれる It is that 節構文は、話し手の個人的な経験や知識に基づかなければ容易には聞き手には知りたい実情を表現するのではない。したがって、It is that 節構文の表す情報を聞き手に伝えることで話し手が知識の優越を聞き手に感じさせる可能性は低いと判断されるため、just と共起する必要性は弱められると考えられる。

It is that 節構文が just をしばしば伴う現象と類似した現象は、南部スウェーデン語の Det är som 構文においても観察される。Rosenkvist (2007) は南部スウェーデン語の Det är som 構文を分析し、Otake (2002) で考察した「の(だ)」構文と It is that 節構文に共通する語用論的効果に言及し、Det är som 構文も「相手を教え諭したり、理屈を説いたり、無知をあげつらう」ような含みを派生し得ること、そうした聞き手に情報を押し付ける含意を積極的に回避するために“bara” (=just, only) をしばしば伴って発話されることを観察している。(20) は南部スウェーデン語の Det är som 構文が just に対応する bara を伴う用例である。

- (20) A: Varför springer kycklingarna omkring i garaget?
 (Lit.) why run chickens.the around.PL in garage.the
 'Why are the chickens running around in the garage?'

B: Det är bara som de har kommit in dit av misstag.

(Lit.) *it is only som they have come in.PL there by mistake*

'They just came in there by mistake.'

(Rosenkvist 2007)

(A: なぜニワトリがガレージを走り回っているの?)

B: 間違っただけであそこに入っちゃっただけなんだよ)

本節では、Koops (2007) では考察されていない帰結や結論を表す接続詞に導かれる *It is that* 節構文が *just* を伴わないそのままの形でしばしば用いられる理由について、語用論的観点から考察を加えた。

5. まとめ

世界にはさまざまな言語がある。それぞれの言語を通して心に映る世界は異なる。しかし、聞き手に容易には同定しがたい解釈や実情を表現するとき、話し手は聞き手の誤解を配慮した適切な表現形式を選択する点では、人間の言語に普遍性が存在すると予測される。本研究では、「の (だ)」構文に対応する英語構文のひとつである *It is that* 節構文に関する最近の論考を検証しながら、解釈・実情を表す形式の意味的、語用論的諸特性を明らかにした。*It is that* 節構文や「の (だ)」構文と同種の構文は世界の言語に存在し、個別言語の研究が活発化しつつある(フランス語の *C'est que* 構文(Pusch (2006)), スペイン語の *Es que* 構文((Delahunty and Gatzkiewicz (2000), España (1996)), 中国語の「是…的 (=shi … de)」構文(杉村 (1995), 郭 (2003), 魏 (2005) など), 韓国語の「것이다 (=kes-ita)」構文や「거든 (=geoduen)」構文(崔 (2006), 金 (2007))。今後は、東西の諸言語を分析し、先行情報の解釈や実情を伝える手段に言語間で個別性が認められるかを明らかにしてゆきたい。

参考文献

- Declerck, Renaat(1992). The Inferential *It is that*-construction and Its Congeners. *Lingua* 87, 303-330.
- Delahunty, Gerald P. and Laura Gatzkiewicz. (2000). On the Spanish Inferential Construction *ser que*. *Pragmatics* 10.3, 301-322.
- España, Margarita Villasante (1996). Aspectos Semántico-Pragmáticos de la Construcción *es que* en Español. *Dicienda. Cuadernos de Filología Hispánica*. 14, 130-147, Madrid: Universidad Complutense de Madrid.
- 魏之涛 (2005). 「説明のモダリティに関する中日対照研究：「～のだ」と「“是～的”句」を例として」精華大学日本語学科卒業論文. [2005年度日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール参加論文] (<http://oaps.lib.tsinghua.edu.cn:8080/dspace/bitstream/123456789/256/1/064> 魏之涛2001013036.pdf)
- 郭穎侠 (2003). 「“是…的”構文の焦点と時制の問題」『現代社会文化研究』第27号, 215-232. 新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- 金廷珉 (2007). 「日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」の意味に関する対照研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第2号, 123-133. 仙台：東北大学高等教育開発推進センター.
- Koops, Christian (2007). Constraints on Inferential Constructions. In Gunter Radden *et al.* (eds.), *Aspects of Meaning Construction*. 207-224. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Lee, David A. (1991). Categories in the Description of *Just*. *Lingua* 83, 5-28.
- 大竹芳夫 (1994). 「It is that構文に関する意味論的、語用論的考察」『英語語法文法研究』創刊号, 117-131. 英語語法文法学会.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫)(2002). Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction. In Ionin, Tania, Heejeong Ko & Andrew Nevins (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 43. 143-157. Cambridge, Massachusetts: MIT, Department of Linguistics, and Philosophy.
- 大竹芳夫 (2003). 「It is that節構文の意味と談話機能：「のだ」文との比較・対照」『英語青年』第149巻 第7号, 436-437, 443. 東京：研究社出版.
- 大竹芳夫 (2007). 「日英語の名詞節化構文の意味と機能：{It is that /S take it that} 節構文と「のだ」構文」溝越彰・小野塚裕視・藤本滋之・加賀信広・西原俊明・近藤真・浜崎通世(編)『英語と文法と』63-75. 東京：開拓社.
- 大竹芳夫 (2008). 『「の(だ)」に対応する英語の構文』博士(応用言語学)学位論文. 浦安：明海大学.
- Rosenkvist, Henrik (2007). An Introduction to the South Swedish Apparent Cleft (SSAC). In Bentzen, Kristine & Øystein Alexander Vangsnes (eds.), *Scandinavian Dialect Syntax 2005*, Special Issue of *Nordlyd - Tromsø University Working Papers in Language and Linguistics*. Vol. 34. 239-250. Tromsø: The University Library of Tromsø.
- 崔眞姬 (2006). 「「のだ」と「것이다」・「거든」の対応関係」『日本語文壇』第34輯, 171-190. 韓国日本語学会.
- 杉村博文 (1995). 「中国語における動詞句・形容詞句の照応形式」『語学研究大会論集』3, 51-66. 東京：大東文化大学語学教育研究所.

辞 書

Cambridge International Dictionary of English. (1995). Cambridge: Cambridge University Press.

Collins COBUILD English Dictionary. New edition. (1995). London: Harper Collins.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. Sixth Edition (1995). Oxford: Oxford University Press.